

大学生活における自己効力感尺度作成の試み

○ 椋橋由衣 (武庫川女子大学大学院)
守谷賢二 (淑徳大学)

吉田梨乃 (東京学芸大学大学院)
斎藤富由起 (千里金蘭大学)

キーワード：大学生活，自己効力感，退学予防

問題提起と目的

大学生活には単位取得や対人関係だけでなく、キャリアの決定、アイデンティティの確立など、多くの課題が存在しており、大学を中心にそれらの課題に取り組んでいるのが大学生の全体像である。それらの課題に適応できず大学を退学してしまう学生もいる。退学傾向のある学生の中には、早期に介入すれば再適応できた学生もいたろう。

これまでキャリア・セルフエフィカシー尺度(小野・斎藤, 2009) など、課題別の自己効力感尺度は作成されてきたが、大学生活全般に関する自己効力感尺度は作成されてこなかった。そこで本研究では大学生活における自己効力感尺度を作成する。

方 法

(1) 調査協力者

関東および関西の大学生合計 163 名(男性 57 名女性 106 名)

(2) 項目の選定

高校生活自己効力感尺度(斎藤, 2018)を参考に、この分野に詳しい臨床心理士 3 名により 30 項目を選択した。基準関連妥当性として STAI-T, 大学生活不安尺度を使用した。なお、大学生活版自己効力感尺度は 5 件法で測定された。

結 果

因子分析結果

天井効果と床効果を確認したところ、項目 3 と項目 24 に天井効果が見られた。これらを削除した 28 項目で、主因子法バリマックス回転による因子分析を実施した。

因子寄与率 0.35 を基準とした因子分析の結果、1 因子 27 項目の大学生活版自己効力感尺度(累積寄与率 38.91%) が作成された。以上の結果を Table 1 に示す。

信頼性と基準関連妥当性

大学生活版自己効力感尺度の信頼性を検討するため、 α 係数を求めた。その結果、 α 係数は 0.933 であった。したがって、本尺度には高い信頼性が認められた。基準関連妥当性を検討するため、大学生活版自己効力感尺度と STAI、大学生活不安尺度との妥当性係数を求めた。STAI との妥当性係数は-.35 であり、大学生活不安尺度との妥当性係数は-.56 であった。したがって、本尺度には十分な妥当性が認められた。

Table 1 大学生版自己効力感尺度

質問番号	項目	因子寄与率
22	大学生活の目標を達成できる	0.778
27	大学生活で自分の可能性を広げられる	0.755
28	絶妙な関心を満たすことができる	0.685
18	大学から大学生活に必要なサポートを得られる	0.677
15	入学以降、人間関係を広げられる	0.675
11	大学内で友だちをつくらることができる	0.666
17	大学内に将来のことを語る友達ができる	0.646
19	就職・進路についての大学からサポートを受けることができる	0.641
29	大学に愛着心を持つ	0.637
10	課題を通じて専門性を高めることができる	0.609
20	就職・進路について課題を得ることができる	0.605
12	大学教員との良好な関係をつくらることができる	0.593
14	大学に何でも相談ができる友達ができる	0.586
7	大学で自分のテーマを見つけられることができる	0.574
23	やりたいことに没頭できる	0.551
9	勉強に打ち込むことができる	0.549
6	希望する教員の課題を受けることができる	0.549
13	アルバイトやサークルなど充実した余暇活動ができる	0.536
26	留学や進路に心配することはない	0.535
16	困ったことがあれば相談できる場所がある	0.532
4	納得できる成績が取れる	0.522
2	受検した課題の単位は落とさない	0.521
30	委員会やコンピュータなど、大学で新しいスキルを身につけることができる	0.521
8	グループでの学習を協力的に進めることができる	0.521
1	課題には休まずに出席できる	0.476
21	健康な状態を維持できる	0.450
25	経済的な不安なく過ごすことができる	0.446

考 察

大学生版自己効力感尺度の標準化について

因子分析の結果から、信頼性と妥当性を備えた大学生版自己効力感尺度の作成は成功したと考えられる。ただし男女差に偏りがあることと、やや調査人数が少ない点は本尺度の限界である。

本尺度の展望

大学生活に不全感を覚えている群への対応は大学の担任や学生相談室が担当していたが、それに先立つスクリーニングや効果研究に役立つ質問紙は乏しかった。

本尺度は 27 項目と簡便で、学生相談室のスクリーニングデータ、そして介入効果を確認する質問紙として有効と考えられる。

そこで、今後の展望として、大学生活の自己効力感尺度を応用し、学生相談室と連携して、自己効力感が低い学生に介入し、効果を検証することが考えられる。